
異界おっさん伝説

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界おっさん伝説

【ZPDF】

Z5230F

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

日本で大工の職に就く誠一が、酒屋を出てからの記憶が無かつた。しかも、目を覚ませばよく分からぬ異界の平原で寝ていた。そんな時、ある剣士と魔法使いに出くわす。

(前書き)

連載候補模索中。テスト作品です。

どこかの次元に地球とは全く違う文化、風土の異世界が存在した。その異世界の中では火、水、土、風、闇、光といった属性の魔法を様々な分野で使い分け、文化や、生活、あらゆるものを作り出していた。

その中には魔族、神族、人間族、妖精族、動物、植物、etcと様々な種族が互いに牽制しあい、時には共生して暮らしていた。人間族の占める割合はこの世界でも多いようである。

そんな人間族の治める領域では幾つかの国が存在する。その中のサスターイア王国が支配する領域にある平原にある男が寝ていた。

「…………」

男は鼻の下から頬、顎と黒い髪が丁度、時計回りに円状に生え揃っていた。

薄く開いた目で酒瓶を枕代わりに、ぼんやり平原のど真ん中で寝転がっていた。

男は実は元々この世界の住人ではなかった。ちょっと前までは日本という国で大工という職業につき、建物の建築に従事していた。昨日、日本という国で酒屋でたらふくお酒を飲んだ後の記憶が無かつた。

しかし、彼の生活からすればそれは良くある事で、本当の問題はつまり

「…………」

だった。

男の日本での名は真下誠一。今、外国の風景番組で出てくれるよ

な綺麗な平原で、のんびりはしているが、内心穏やかじやなかつた。

「まあええか

それでも、訳の分からぬ土地で闇雲に走り回つても仕方が無いので、また寝ることにしたようだ。

「…………」

キン、ガキン、ボオ～～！

誠一は太陽の柔らかい日差しの中、気持ちよく寝ていた。だが、周りが騒がしい。薄く片目を開けて、その騒音の主を見据える。

中世の鉄鎧の置物みたいなのが、長い剣をふるつて、猪のちよつと大きいのと戦っていた。その後ろには、黒い怪しいローブを着た少女が杖片手に突つ立つっていた。

「つええ！ ミルク魔法だ！」

「ファイアボール～～！」

少女は杖の先から火の玉を搾り出すと、猪の大きいのに当てた。猪は体表が炎に包まれて熱そうだった。

魔法をしてから、体を横にして誠一はその一部始終をじつくり眺めていた。

「よつしゃ～倒したぞ！」

「さすが、剣士様～」

猪は丸焼きにされて地面で、いい匂いを醸し出していた。

当然、近くにいる誠一にもその芳しい香りは届いていた。誠一はお腹がぐうぐうと鳴つた。

よく見れば日は天高く上つていて、もう暁時である。辽くきて随分寝ていた氣もする。

誠一は空腹時間が長い事にやつと気づいた。

そんな誠一の目の前で、剣士達が喜びのダンスというよりは、笑顔で手をとりあつて、その場で回転していた。よほど猪を倒した事が嬉しかつたみたいだ。

誠一はガキっぽい連中だなつと思いながらも、いそいそと匍匐前进をして、剣士達の足元までやってきた。

まだ回転していた。誠一は平原に置いていた手を踏まれた。

「いやーーー！」

「ん？　おっさん、誰？」

「剣士様、さつきからジロジロ私たちの事見てましたよ～」

「なに！　怪しい奴！　名を名乗れ！」

剣士はおっさんが近くにいた事を今知ったようだ。手踏まれた上に、いきなり怪しい奴呼ばわりされて、誠一はなんだか無性に腹が立つてきっていた。女も女だ、何でそんな風に言つんだ　と怒りの要素はいくらかあって、取りあえず、寝てては威厳も何も無いので立ち上がる事にした。

「坊主、今ワシの手踏んだん分かつとる？」

「はあ？ 怪しきやつめ

剣士は長い剣の切つ先を誠一に向けてきた、やる気まんまんらし
い。

「剣士様やつちやえへそんなおっさん倒しちゃって下を…」

後ろのミルクが剣士の影から言いたい放題だつた。

誠一は頭を搔いた後、何かを食べているかのように唇を波打たせ
た。

やれやれ、最近の若いもんは、礼儀がなつてねえな

剣士は剣を大上段に振り上げたまま、奇声を上げて誠一に突進し
てきた。

誠一は横にさうじと交わすと、足まで引っ掛け剣士を平原に転
がした。

顔面から倒れた剣士は、鎧が重いせいか起き上がりない　とい
うのは間違いで、誠一が近くの大岩を、その背中に乗せて立ち上が
れないようにしていた。

右手に握っている剣を蹴り飛ばして、誠一は剣士の前に躊躇なくや
ら語りだした。

「ほら、この手みてみ、小僧のじつづつ重い鎧の足に踏まれてな、
赤くなつてるやろ？ めちゃ痛いねん、これお前がやつたんやで、
どないしてくれるん？」

誠一は言つて聞かそつと、比較的やんわり口調で剣士に言つ。

しかし、そんな事は知らんとばかりに、剣士はミルクに大きな声
で命令した。

「魔法だ、ミルク！」

「はい！ ファイアボール！」

誠一はその魔法を一度見ていた。ミルクが杖を翳して炎が飛び出るまで、5秒はかかることは分かっていた。その間に懐から日本で買ったタバコを取り出し右手に持つた。

「いけー！」

ミルクがそう叫ぶと、大きな炎が誠一目がけて飛んでくる。深いため息をついた誠一は、頭でカウントしていた。

3、2、1

カウントが終わると、ひょいっと地面にしゃがむ。頭の天辺を炎が通り過ぎていく。

その刹那、きつちり誠一はタバコの先を炎に掠めていた。

魔法の炎で火がついたタバコを、口に咥えると、上手そうに目を閉じて吸つた後、ふーっとドーナツ型の煙の輪を息とともに吐き出した。

それをみたミルクと剣士は啞然としていた。
だが、剣士は我に返ると再びミルクに命令した。

「もつと打つんだ！」

「はい！」

ミルクが呪文を唱え終わると、杖に炎が宿り始める。

誠一は剣士の寝そべる場所まで、既に移動していく蹲っていた。
そして、徐に赤い火が灯るタバコの先を剣士のヘルムの隙間から
差し込んで頬に近づけると、

「炎うつたら、剣士の頬に火焼き付けるで！」

と、脅した。

剣士は悲鳴をあげると、ミルクに怯えた声で、

「やめる、ミルク！　俺達の負けだ！」

あっさり負けを認めた。ミルクは力なく杖を降ろすと、その場で
ぺたんとしゃがみ込んだ。

剣士の命令はミルクにとつて絶対だった。

#

「そやろ、手踏んだんやから、お前らが謝るのが筋つてもんやわな」

「はいすみません、その通りです」

「「めんなさい、おっさん」

剣士とミルクは誠一に正座するよつ言われて、二人並んで平原の
上で並んで座していた。

その前で誠一は胡坐を搔き手を拱いて、厳しい顔で説教を垂れて
いた。

ちょっと常識の無さそつな一人に日本で言つ、筋道つていうもの

を教え込んでいた。

ミルクが、自分の事、『おつかれ』と言つたのを聞いて、眉を潜める。

「ミルクちゃんにうたかな、レーティがな、そんな汚い言葉つかつたらあかんで」

「ええ！？ じゃ何て言えば？？」

「もうやなあ、ワシのひと知らん場合はおじさんつて言つのが妥当やうな」

「ふむむ、分かりました、おじさん」

話してみると案外素直な一人に、誠一はほつとして微笑んだ。
根は悪い子やないと心で思う。そんな時剣士が何か言いたそうに、
誠一に真剣の眼差しを向けていた。

「あの～、

「ん？ なんや小僧」

「あの～、その～だから～、えつと～……」

剣士がしどりもどりして中々言わないでの、誠一はいらっしゃひして
きて怒鳴った。

「ほけー男ならせつかりせんかーわれ～～！」

「はーーー、あのですね、僕たちの歸匠になつてくれませんか！」

剣士は頭を深々と平原の草にこすり付けて頼む。ぼーっとしているミルクをみて、剣士が右手でその頭を平原に押し付けた。目の前で一人の土下座を見せられて、誠一はその誠意ある態度に本気である事を悟る。

厳しい顔でしばし一人を眺めていたが、胡坐の足を手の平で軽く打つと、

「よつしゃ、分かった、師匠なつたる。お前たちは今日から俺の弟子だ」

「おお～師匠～！ 有難うござりますー！ ほひ、ミルクも」

「有難うござります……」

大喜びの剣士は鎧をがちゃがちゃ言わせて、何度も誠一にお辞儀をしていた。

それとは対照的にミルクは虚うな瞳で、どこか悲しげだった。

「じゃ自己紹介せんな、ワシの名は誠一や、ちょ覚えといてや

「はい！ 僕はスランと言います」

「ミルクです……」

一通り自己紹介が恙無く終わると、誠一は何か思い当たつて、ごほんっと咳き込んだ後、また重々しい口調で一人に言つた。

「そんでな、ワシここ來たばかりやねん、お前たちの師匠なわけやけど、ワシはここのことなんもしらん、色々教えてもらわんと困るん

や、その辺頼むで

「任せてください！」の地方の事なら何でも知っています！ 近くのセギ村へ取りあえず行きましょう！」

剣士は少し得意な顔で誠一の肩に触れながら、セギ村に案内しようと平原を歩いていく。

そんな一人には気後れしながらも、さつと立ち上がってロープのお尻の部分をぱんぱんと握つと、ミルクも後を付いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5230f/>

異界おっさん伝説

2010年10月11日11時32分発行